

『猫ねこが「どうして」と鳴ないた晩ばん』

作者 浅羽一

例えばこんな想像をしてみる。実は、世界は昨夜、私の眠っている内に滅んでしまっていて、訪れる者のいないこの部屋の扉を開けてみれば、そこにはただ荒漠たる風景が広がっているばかりで。世界に残された価値あるものは、唯一この部屋という存在だけなのだ。なんて素晴らしいのだろう。

だとすれば、この部屋で暮らす私と、そして彼は、まさしく新世界のアダムとイヴだ。世界が終わったからといって、私達までが終わってしまう必要など無いのだから。むしろ、二人の愛が消えてなくなる可能性に比べれば、世界の誕生と死滅が一週間おきに繰り返される可能性の方が遙かに現実的だろう。

どれほどの時を経れば永遠と呼ばれるのか、知らないし、知ろうとも思わない。なぜなら、私達はすでにその一端を担っているのだから。いつかこの肉体の朽ち果てる瞬間が来ようとも、二人の想いだけは決して尽きることなく胸の奥から溢れ続けていく。だとすれば、一生の全てを紛れもない愛で染め抜いた私達は、つまりそのまま永遠という純色の時の流れの中に同化してしまうのだ。

：ああ、素晴らしきかな人生、いや、彼と共に過ごす永遠。

もしも誰かがこの部屋の扉を開けたなら、きつと羨ましがる事だろう。ここには、真の幸福が空気よりも濃く満ちているのだから。

彼はとても優しい。

私が彼に話し掛けるとする。「最近、ひったくりが起きているんだって。すると彼は「そうなんだ。怖いね。気を付けるんだよ」と応える。

また、私が話し掛ける。「昨日、雨上がりに虹を見たんだ」。

彼は「そうなんだ。良かったね。綺麗だったかい」と応える。

私が「とても綺麗だった。あなたにも見せて上げたかった」と言うと、彼は温かく微笑んで「そっか。見られなかったのは残念だけど、そう言ってくれる気持ちは何よりも嬉しいよ」と返す。

そうして私は彼に伝えて貰いたくて色んな事を声に乗せる。

「この間、信号が四回連続で青だったんだ」

「そうなんだ。それは幸運だったね」

「正直、あの映画はもう少し明るい終わり方で良かったと思うな」

「なるほど。君はハッピーエンドが好きだものね」

「明日は雨が降ったり止んだりするんだって」

「そっか。それなら折りたたみ傘を持っていったらどうだい」

「私、あなたの事を愛しているわ」

「ありがとう。僕も君の事を愛しているよ」

彼は必ず、私の言葉をちゃんと受け止めてくれる。それだけで、私はとても安らかな幸せを感じられる。そっと髪を撫でられるたびに、自分が溶けて崩れてしまうのではないか

と灰かに心配になりさえする。同時に、そのまま彼の中に混ざってしまえるのならばそれも素敵だと、結局は瞳を閉じて全てを委ねてしまう。

二人きりの部屋で、二人だけの暮らし。派手さはなく、大げさな生活でもなく、至って平凡で平穏な時間を過ごしていくだけ。けれど、それこそが他のどんな物事よりも、私の日々に特別な価値を与えてくれる。だから私は心から平凡な平穏を愛おしく想うし、絶対に彼の事を裏切らないでいようと誓う。

時折、彼は私に手料理をせがむ。私はそれがとても嬉しい。人が生きる上で間違いない大切な「食べる」と言う行為の根幹を、私に任せてくれているという証だからだ。勿論、私はその信頼に全力でもって応えようとする。とは言え、一から畑を耕し、家畜を育て、全ての材料を自らこさえる事は不可能な為に、出来る範囲内で最高の食事を用意する。

彼の好物は決まっている。彼は、猫が好きなのだ。それも、若く美しい猫の腕の、最も柔らかい肉の部分が。他は要らない。足は中途半端に硬いし、腹は余計な脂肪が多すぎる。内臓は現代の汚染がそのまま現れるので風味が悪いし、頭は見かけばかりでパサパサだ。目玉も変に濁っていて食う気が失せる。食材の選別は慎重に行わなければいけない。それによって、完成する料理の善し悪しの大半が決まるのだから。

そうして私はいつも、彼に「待っていてね」と笑みを残し、最高の猫を求めて部屋を出る。携えるのは良く研いだ中華包丁と、小さめのクーラーボックスだけだ。それで十分だ。クーラーボックスには可愛らしく擬人化された野菜のシールを貼っている。

一向に滅びそうもない繁華街を彷徨い、明るい雰囲気のある学校の周囲を通り、閑静な住宅地を巡り、人気のない夜の公園を適当に回る。たまに不細工な猫や、臭いのきつい猫、はたまた不味そうな犬とすれ違いますが、関係ない。やがて、目的の品が見つかるまで果てしなく歩き続ける私の前に、遂に最高の猫が現れる。私は迷うことなく食材を手に入れる。

近付く際は特に気負わない。むしろ妙に身構えると逆に不自然になって警戒される。だから普通に歩を進める。目が合っても急に逸らしたりせず、素知らぬ顔で後を追う。それから適切な場所へ移るのを待ち、いつしか辺りに人影が無くなった瞬間、手早くクーラーボックスの中にしまっていた大きな中華包丁を取り出して、その背を思い切り猫の頭に振り下ろす。

硬い鋼から伝わる感触は、頭蓋骨を「砕く」と言うより「割る」と言った方が相応しい表現だろうと教えてくれる。たいていの場合、一度の衝撃で猫は絶命する。それでも中には辛うじて意識を保っている猫も確かにいる。私は、かすれた声で「どうして」と鳴く猫の頭に、さらに中華包丁の背を振り下ろし、完全に息の根を止める。それから、猫を横にして、今度こそ刃を下に向け振り下ろす。細い手首と、二の腕の付け根を、それぞれ一息で切断する。切れ味鋭い中華包丁は、容易く骨まで両断する。心臓の止まった体からそれほど血は流れない。二分と掛からず左右共に作業を済ましたら、切り取った腕を丁寧に畳んでクーラーボックスに並べて入れる。余った残骸は捨てていく。邪魔なゴミを拾って帰っても意味がない。死体を集めて悦に浸る趣味など私も彼も持ち合わせていない。

部屋に帰るとまず「ただいま」を言う。彼は笑顔で「おかえり」と返してくれる。私はいそいそと料理の支度を始める。他の材料はすでに用意してある。当然ながら、どれも厳選したもののばかりだ。

クーラーボックスから取り出した腕の毛を剃り、綺麗に洗い、一本は軽く絞ってそのま

ま野菜や香草と一緒に水を張った寸胴鍋に入れて火に掛ける。残りの一本はきちんと皮を剥いで、骨を抜き、肉の間から丁寧な神経や血管を分離させる。臭みが残ったり、舌触りが悪くなつては、せつかくの食材の旨味が半減してしまふから、下ごしらえは念入りにする。肘の関節にある軟骨は、晩酌の際のつまみに出来るので捨てずに取っておく。

鍋の火加減を調節しながら浮いてくる灰汁をこまめにすくう。桃色に輝く新鮮な肉は、中華包丁で叩くように刻んで粗めの挽き肉状にする。せつかくの素材なのだから、そのまま塩胡椒を軽くふつて、バターとニンニク、そこに少々の醤油を垂らして焼いても美味しくなるだろうが、彼の好みハンバーグなのでそれにする。変に味を押しつけるよりも、本当に彼が望んでくれていた物を提供して上げたいからだ。それに、ハンバーグなら、肉を手でこねている時に、愛情もじっくりと練り込める気がするから。みじん切りにしたタマネギや卵の黄身、削って粉にした食パン、生姜の汁と言った一般的だろう材料だけでなく、隠し味としてすり下ろした林檎なども混ぜてこねる。一通り終わったら、それをラップで包んでしばらく寝かせる。味を良くなじませる為と、全体に広がった林檎などの酵素成分が肉の蛋白質を分解して旨味成分が増すのを待つ為だ。その間に、鍋の様子を見ながら赤ワインやスパイス、さらに丹念に熟成させられた質の良い醤油を使って、その味を調べていく。部屋の中に深みのある芳香が漂い、彼が「楽しみだよ」と笑いかけてくれる。

鍋の中身がとろりとしてくるまで、使った調理器具を洗ったり、付け合わせの野菜を切ったりする。やがて良い具合に水気が飛んできたら、火を弱くしてさらにじっくり煮込む。その間に、寝かせていたハンバーグの種からラップを外し、形を整える。さり気なくハート形にしたりする。恥ずかしいので、敢えて言葉にする事はしないけれど。

熱したフライパンに無塩バターを引いて種を載せる。バターを焦がさないように注意しながら、強火で一気に表面を焼く。食欲をそそる音が響き、肉汁とバターの焼ける香りが広がる。両側の表面に焼き色が付き、音が変わってきたら、火を小さくして蓋をする。余熱でじっくり中まで火を通す感じで待つ。ここで焦れば台無しだ。私は彼に「もう少しだから、待っててね」と告げる。彼は「もう少しか。楽しみだよ」と笑ってくれる。

食器を用意し、テーブルの上に並べ、さらにちよつとだけ奮発して買っていたシャンパンを冷蔵庫から出して真ん中に置く。いよいよ晩餐の準備が整っていく。

焼き上がったハンバーグを付け合わせの野菜と共に皿に盛り、煮込んだシチューを見栄え良くそれにかける。有機栽培の小麦と天然酵母で作られたパンを添えて、遂にテーブルの上に料理が並ぶ。「お待たせ。さあ、食べましょうか」。私がそう言って席に着くと、彼もまた「ありがとう。とても美味しそうだよ」と言ってくれる。

鏡のように磨かれたナイフは、いとも容易くハンバーグの中に沈んでいく。途端、中から透明な肉汁が溢れ、鮮やかに色づいたシチューの上を滑る。不可思議な形に広がった光沢が天井からの明かりによってきらきらと輝く。一口大に切った肉塊にフォークを刺して、舌に載せる。適度に熱いそれは、味覚を活性化させ、同時に口腔内から鼻腔へと香ばしくも甘い匂いを充満させる。無意識に溢れてくる涎が肉汁と混ざって口の中に濃密なジュースが生まれる。咀嚼するたびに、歯が心地よい感触を脳に伝え、脂と絡まったシチューが舌を浸し、喉は愉悅の声を上げながらジュースを飲み干す。：思わず溜息を吐く。と、彼が「凄いよ。とっても美味しい」と嬉しそうに感想を述べてくれる。再び、先ほどとは少しだけ違う意味で溜息が漏れる。

パンを千切り、皿のシチューを付ける。柔らかく白いパンに、紅色のシチューは妖しく映えた。口に入れると、風味豊かなパンと、奥行きのあるシチューの味はとても良く調和して、これもまた美味だった。彼も喜んでくれていて、きっと自分は今、この世界で最も幸福な時間を過ごしているのだと確信する。爽やかな香味を放ちながら、身も心も温かくなつた体の中心を滑り降りていく冷えたシヤンパンの快感に、反射的に背筋が震える。一瞬遅れて喉の奥で生じる熱さと、芳潤な余韻に、胸全体が満たされる。

「いつもの料理も美味しいけれど、今日のはまた一段と美味しいよ」

「ありがとう。喜んでくれて、私も嬉しい」

「僕の方こそ、いつもありがとう。本当に、心からそう思うよ」

「私だって、あなたがいてくれて本当に幸せよ」

「愛しているよ」

「私も愛してる」

我ながら上出来な料理に、穏やかな会話、優しい笑顔、確かな温もり。どれほど平凡な日々であろうとも、その中でこんな風に食卓を囲める瞬間を得られるのならば、きっと誰もが自らの幸福と、そんな一時を過ごせる相手と出会えた幸運に感謝するはずだ。神だとか悪魔だとか、そんなあやふやな存在などにはなく、紛れもなくそこに在る現実の全てに。頭の中で、「どうして」と鳴いた猫の顔が浮かんできて、だから私はそれにも微笑みながら感謝した。「彼に笑って貰いたいから。それを見て、私もまた笑えるから」。胸の中でそう答えると、猫の姿は溶けるように消えて、代わりに愛しい微笑みが私の視界を独占した。心の底から、人生は素晴らしいと思った。この気持ちをつかち合えたのなら、世界から争いなんて消えて無くなるに違いない。事実、自然と頬はゆるんでいて、私と彼はずっと笑い合っていた。

幸せな毎日、最高の日常、二人だけの部屋で、二人だけの暮らしを送りながら、永遠を形作る一瞬一瞬を笑顔で彩っていく。何も変わることもなく、何にも代えられない、大切な日々。私と、彼、互いに支え合って生きていける幸せ。たった一人の価値ある人と、同じ時間を共有し、身も心も溶け合い、命を同化させているとさえ感じられる安らぎを与えられた私は、一体どれほどまでに恵まれているのだろうか。「愛しているわ」。「ありがとう。僕も愛しているよ」。素直な言葉だけで、さり気ない優しさだけで、泣きそうになるくらい心が震える。きっと私の肺は、最早、空気だけでなく部屋の中に満ちる幸福を取り込んでいて、心臓はそれによってこそ動かされているのだ。実際、彼のいない場所でこんなにも胸が苦しくなるなんて、ほんの刹那でさえ無いのだから。

だけど、それなのに、だ。そんな私達の幸福を妬んだのか、世界は突然に、平凡ながらも平穏な幸せを壊そうとしてきた。無粋な来訪者がいきなり部屋に押し入ってきたのは、夜も更けてそろそろ眠りに就こうとしていた時の事だった。

寂しく残酷な世界に飼われた犬は、ここぞとばかりに獰猛な本能を解放し、乱暴な態度で私達の部屋を蹂躪した。わけの分からない言葉で吼え、臭い息を吐いて部屋の中を侵し、押入の中にしまってあった骨を我先にしゃぶろうと奪い合う卑しさに、まともな気配は微塵も存在しなかった。獣に相応しく血走った目からは、狂気さえ感じられた。

私は恐ろしさのあまり悲鳴を上げそうになった。自身の細い手首を痕が残るだろうほどにきつく掴まれて、恐怖と嫌悪で気を失いそうになった。

だが、その寸前で私は理性を取り戻す事が出来た。他の誰でもない、彼が、私にだけ聞こえる声で、そっと「大丈夫だよ」と囁いてくれたからだ。「君は、僕が守るから。だから安心して」。途端に体から緊張は消えて、私は己の足でしつかりと立つ事が出来た。やはり、私の体は彼のものでもあるのだと、確信した。

そうして私は、自らの意思で歩き出した。犬は好物の骨を見つつけられて落ち着いたのか、幾分か大人しくなっていて、何となく彼と一緒に犬を散歩している場面を連想してしまった。ただし、時折、戯れに鎖を引いてやると、醜い顔をした大型犬は不満そうに足を踏ん張ってきて、どうせ飼うのなら絶対に可愛らしい小型犬にして、子供の頃から利口に育てようと決めた。彼は「なるほど。確かに、君には小さい子の方が似合いそうだ」と笑ってくれた。

住み慣れた部屋から離れていっても、もう不安を抱きはしなかった。彼が傍にいてくれるのであれば、世界の果てであつてもきつと自分は何も変わらず幸せな永遠を送れるのだと、私はすでに知っていた。

彼とこの部屋に引越してきてから、もうずいぶんと長い時間が経った。キッチンもなく、とても手狭で殺風景な部屋であつたけれど、やっぱりそこに満ちる温もりに違いはなかった。彼はいつでも私と共にいて、私達は笑い合っていた。

ただ、一つだけ、不満ではないのだけれどかすかに残念だったのは、彼に色んな料理を作つてあげられなくなった事だ。調理器具がない為に、ハンバーグはもう作れそうになかった。

しかし、代わりに新たな発見もあつた。それはしばらく前に、彼がこの部屋に来てから初めて、私に手料理をせがんできた時の事だつた。

私は当初、どうしようかと考えた。けれどすぐに彼が気付かせてくれた。真に大切なのは、手の込んだ料理をこしらえる事ではなく、どれだけ食べてくれる相手の為に想いを込めてやれるのかと言う事だ。それこそが、手料理の基本で、同時に神髄でもあるのだ。

迷う理由など、最早、一つもなかった。素材の良さには自信があつた。なぜなら今度の腕は、それまでの猫の腕なんかよりも遙かに、強く、しかも深い愛情がたつぷりと注ぎ込まれていたのだから。それも彼だけに對しての愛情が、だ。そう考えれば、それ以上に彼へ捧げるに相応しい食材なんてこの世の何処を探しても見つからないだろう。

私は、思い切り噛みついた。柔らかな二の腕は、齒に心地よい弾力と、舌触りの良い滑らかさを持っていて、直後に溢れた鮮血は瑞々しく芳潤だった。少しばかりはしたないかなと思いつつも、音を立てて肉を咀嚼していると、口の中に満ちる野性味豊かな香味の奥から、清々しい甘味がふわっと広がった。かと思えば、止めどなく出てくる唾液が潤滑油となり、肉はするりと喉を落ちていく。その潔さが却って、さらなる食欲をそそのかすのだ。

目から鱗が落ちるほど、想像以上に美味しい「手料理」に、彼は歓喜してくれた。だから

ら私も嬉しかった。大切に育ててきた愛情を、彼に価値あるものとして受け入れてもらえて、それは紛れもなく至福の一時だった。

私は本当に、誰よりも彼を愛し、彼に感謝している己の事を、誇らしく思った。同時に、きつとこれからも、彼によって沢山の新しい発見があり、さらに人生を豊かなものにしていけるのだろうかという確信を改めて自覚して胸が躍った。結果的に腕は後一本だけになつてしまったけれど、不安なんて欠片も浮かんでこなかった。だって、またいつか、彼が手料理をせがんでくる日が来て、残った腕を捧げてしまったとしても。必ずや、彼はまた新しい発見を私にさせてくれるのだろうか、それによって私はその次も彼に喜んで貰う事が出来るのだろうか。そうして私達は、肉体が朽ち果てるまで、扉の向こうの世界が滅びようとも、この濃密な幸せの中で互いに想い合っていていけるのだ。

ああ、なんと素晴らしいか、いや、彼と共に過ごす永遠。

私は心から、この世に生まれた幸福に微笑みを浮かべよう。

〈了〉